様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：３０１０８
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１６６９６

研究課題名（和文）中期インド語文学から近代諸語文学への移行におけるジャイナ教聖者伝とラーソー文学

研究課題名（英文）Jain Hagiography and Raso literature; in transgression of literary language from Middle Indo-Aryan to New Indo-Aryan

研究代表者
山畑　倫志（YAMAHATA, TOMOYUKI）

北海道科学大学・全学共通教育部・准教授

研究者番号：００５２８２３４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、未だ不分明な中期インド語文学と近代インド諸語文学の関係を明らかにすることにある。そのために9-12世紀に北インド西部で多く作成されたジャイナ教聖者伝と、12世紀以降に作品が増えるラーソー文学の間の影響関係を解明することを目指した。
具体的には最初期のラーソー文学の多様性、第22代祖師ネーミナータ説話の変容、外部から導入されたラーマとクリシュナの役割の違い、ネーミナータにまつわる聖地のそれぞれについて考察し、クリシュナとの関連が強い祖師ネーミナータが聖者伝文学とラーソー文学の双方で重視されており、ネーミナータ説話を介在として初期の古グジャラート語文学が展開した可能性を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
インド文学の歴史において中期インド語文学と近代インド諸語文学の関係については未解明な部分が多く残っている。しかし、北インド西部のジャイナ教徒は中期インド語に加え、近代インド諸語の1つである古グジャラート語を用いた作品も複数作成している。特にラーソーと呼ばれるジャンルは中期インド語による聖者伝文学を引き継ぎながらも、主題や形式において新しい特徴を多く持つ。
本研究では、クリシュナとの関連が強い祖師ネーミナータの説話を介して初期の古グジャラート語文学が展開した可能性を明らかにした。このことは、クリシュナ信仰に基づくバクティ運動が当時の北インド西部地域のジャイナ教へ影響を与えたと考える根拠となりうる。

研究成果の概要（英文）：It is still not clear how the Literature of Middle Indo-Aryan languages (MIA) affected the formation of the Literature of New Indo-Aryan languages (NIA). Jains composed numerous hagiographical works in the Prakrit or Apabhramsa languages (MIA) for centuries. They adopted the Raso style mainly for writing their hagiography from the 12th century in Old Gujarati language (NIA). The Raso literature became famous particularly as the style for heroic tales of Rajput kings from the 14th century to the 16th century.
This research planned to clarify the relationship between the two kinds of literature. We have studied four points, the classification of the early Raso Literature, the historical change of the story of Neminatha, Rama and Krishna in the Jain hagiographical literature and the Raso literature about Jain holy places.
As a result of these researches, we suggested that the Neminatha story played a critical role in the expansion of early Raso literature.

研究分野：インド哲学

キーワード：ジャイナ教文学　ラーソー文学　古グジャラート語　ネーミナータ　クリシュナ　聖地信仰　聖者伝文学　バーラマーサー

１．研究開始当初の背景

インドの文学作品の歴史において、サンスクリット語文学からの伝統を引き継いだ中期インド語文学とヒンディー語やグジャラート語などによる近代インド諸語文学の関係には未だ明らかではないことが多い。本研究では、それを解明するために両者の狭間の時期に多く作成されたジャイナ教の聖者伝と、俗人の英雄伝記として知られるラーソー文学という二つの文学形式を鍵とし、相互の影響関係を見出すことを目指した。

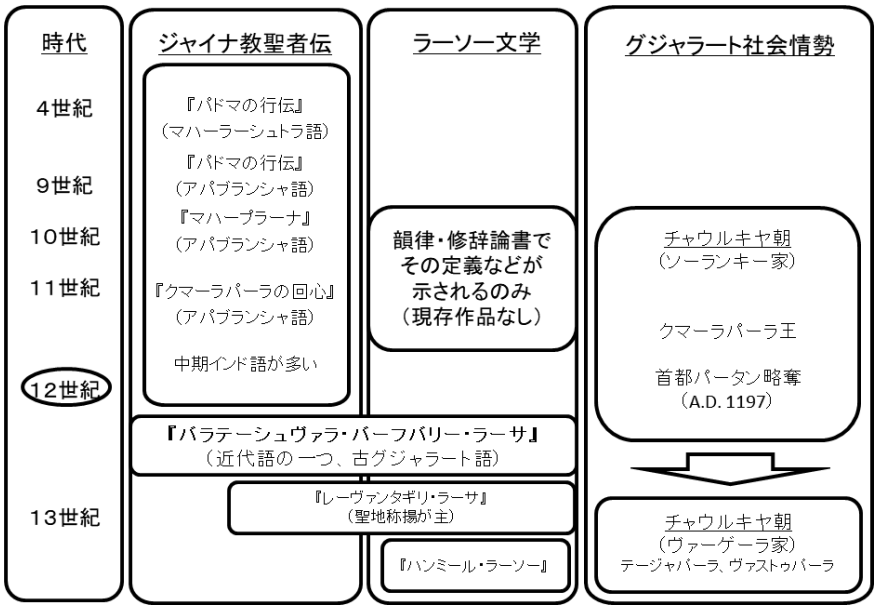

図１.北インド西部における文学活動の展開

古典文学の伝統を受けて展開した中期インド語文学だが、その後の時代にあたる近代インド諸語文学との関係は強いとはいいがたい。特にインド社会が大きな変化に見舞われた 12 世紀前後には文学作品の様相も大きく変わっている。北インド西部地域においても変動が激しく、当時その地域で勢力の強かったジャイナ教団も組織の変化を余儀なくされたと推測される。それまで古典文学の伝統を踏まえながらも独自の発展を遂げていた中期インド語のジャイナ教聖者伝も 12 世紀ごろには勢いを失い、新たに近代インド諸語によるラーソーという形式の作品が出現する。最初期のラーソーは内容がジャイナ教聖者伝と同様であるため、ラーソー出現の背景には当時のインド社会とジャイナ教団の変質があると考えられる。（図 1. 参照）

プラークリット諸語の１つであるマハーラーシュトラ語やアパブランシャ語などの中期インド語によるジャイナ教説話文学の研究は今世紀初めより活況を呈してきている。特に Eva de Clercq が 2003 年に代表的なジャイナ教聖者伝の『パドマの行伝』（アパブランシャ語）の新校訂と翻訳を博士論文としてヘント大学に提出するなど、ジャイナ教説話研究はその基礎となる部分が急速に固められてきている。しかし、中期インド語文学の次の時代に当たる古グジャラート語などの文学は個々の作品の校訂や出版がまだ多いとはいえず、特に両者の直接的な関係を示す個々の作品に基づいた研究も活発であるとはいいがたい。そのため、サンスクリット語文学を含む古典文学と近代諸語文学のミッシングリンクは未だ繋がっておらず、その部分の解明がインド文学の歴史的展開を描写する上での課題となっている。

研究代表者はこれまで中期インド語の最新層にあたるアパブランシャ語を言語特徴とその使用環境に基づいて、実態の解明に努めてきた。これまでの研究の中でアパブランシャ語は各地域の言語の直系の先祖ではなく、インド西部の言語を母体として、中世の一時期に流行した文語の一種であるとの結論に達した。しかしアパブランシャ語を越えて、より広い視点から文学の変遷を眺めると、12 世紀頃を境にして、中期インド語文学から近代インド諸語文学へと大きな変化が生じている。その具体的な状況や原因についてはまだわかっていない。だが、上で述べたように、そこにはジャイナ教団自体や社会状況の変化などが背景としてあったことが推測できる。そこで、これまでのアパブランシャ語研究を基礎として、その直後の時代にあたるラーソー文学との関係を探ることにより、12 世紀前後に生じた大きな変化の具体的様相を明らかにすることが可能と考えた。

２．研究の目的

本研究の目的は、主に中期インド語で書かれたジャイナ教聖者伝文学と古グジャラート語などの近代インド諸語によるラーソー文学の影響関係を明らかにすることである。そのために以下の項目を具体的な研究目的とする。

（１）韻律や説話形式の変化

既にアパブランシャ語文学をテーマとして、当時の韻律学や文法学の文献をもとに、韻律や説話形式の発展を描き出す成果が研究代表者の研究により得られているが、アパブランシャ語文学とラーソー文学の具体的な関係の解明においても、このような文学形式の継承の確認作業は必須である。具体的には同時期の修辞学や文法学関連文献の記述、『パドマの行伝』などの影響力の大きいアパブランシャ語説話作品とラーソー文学のうち主に初期の作品の韻律と説話形式を精査し、その関係を明らかにする。

（2）ジャイナ教 63 偉人とラーソー文学の主題の関係
　ジャイナ教徒による初期ラーソー作品を見ると、ジャイナ教徒によるアパブランシャ語説話文学の影響は韻律や説話形式のみならず、内容にまで及んでいる。最初期のラーソーである『バラテーシュヴァラ・バーフバリ・ラーサ』の主題であるバラタとバーフバリンは 63 偉人には含まれないながらも重要な人物であり、聖者伝文学の範疇にあるといえる。そこで、アパブランシャ語による代表的作品である『パドマの行伝』『マハープラーナ』を通じてそこに見られる多様なテーマがどのようにラーソー文学と関連づけられるか、またより後代の非ジャイナ教徒による英雄伝記としてのラーソー文学にまでその共通性を見られるかどうかを探り出す。

（3）ジャイナ教文学に与えたラーマとクリシュナの影響
　ジャイナ教聖者伝文学は主に 63 偉人という聖者の伝記から構成されるが、祖師たちの伝記を除けば、ラーマとクリシュナの伝記がかなりの部分を占める。両者ともジャイナ教の外部から導入された人物ではあるが、聖者伝文学の大部分は彼らが主役ないし準主役の位置づけに置かれる。その状況がラーソー文学にどのような影響を与えたかを調査する。

（4）聖地信仰文学の興隆とラーソー文学
　インドの各地に見られるような聖地信仰はジャイナ教にも存在するが、実際に聖地称揚の文学として現れるのは初期ラーソー文学における記述が最も早い。グジャラートのシャトルンジャヤ山（レーヴァンタ山）を題材とした『レーヴァンタギリ・ラーサ』が代表的なものであるが、具体的な聖地について記述する文学作品がラーソー文学と同時期に現れた背景について考察する。

　以上の各要素の分析をもとに、本研究ではジャイナ教徒がラーソー文学を作成した経緯とラーソー文学というジャンル自体の変質の過程を文学形式と言語、内容の各面から明らかにする。

３．研究の方法

（1）聖者伝文学の記述とラーソー文学の韻律を含めた修辞的要素の比較
　研究代表者はこれまでアパブランシャ語聖者伝文学作品について、63 偉人の特徴や言語、韻律等についての研究を行ってきた。それらを踏まえて、まず聖者伝文学の韻律や形式とラーソー文学のものを比較し、引き継がれた要素と新しく導入された要素を明らかにする。その際にはラーソー文学よりやや遅れて現れるバーラーマーサー文学やパーグ文学も含めて検討する。

（2）初期ラーソー文学の性質解明
　最初期のラーソー文学作品は 12 世紀頃から確認できるが、ラーソー文学はジャイナ教徒のラーソー文学と英雄伝記としてのラーソー文学に大きく 2 種類に分けられる。特に最初期のラーソーはほぼジャイナ教徒によるものであり、後代の英雄伝記としてのラーソー文学とは異なる要素が多い。またこの時期はアパブランシャ語によるジャイナ教聖者伝が多く書かれた最後の時期と重なっている。そこで、多様な内容を含む初期ラーソー文学の特色とアパブランシャ語によるジャイナ教聖者伝との関係を調査する。

（3）ラーソー文学、古グジャラート語文学の写本収集
　ラーソー文学や古グジャラート語文学には刊行されていない作品が非常に多く、その全体像を把握しがたい状況にある。そこで古グジャラート語文学やラーソー文学の写本を多く収蔵しているインドグジャラート州とラージャスターン州各地の文書館や研究所を訪問し、残存する写本の全体像を把握する。

４．研究成果
（1）ラーソー文学とジャイナ教説話文学の関係
　アパブランシャ語文学と初期ラーソー文学がかなり近い関係にあったことは、最初期のラーソーの一つである『バラテーシュヴァラ・バーフバリ・ラーサ』が、アパブランシャ語文学の大部分を占めるジャイナ教聖者伝文学と同様のテーマを扱っていることからも推測できる。アパブランシャ語文学の影響を直接受けているのは、そのテーマと形式から見て、ジャイナ教の聖者を扱ったラーソーであることは明らかであるが、初期のラーソー文学には後代では異なったジャンルとなる多様な作品も含まれていた。その背景には、長大な作品中に種々の要素を含めていたジャイナ教聖者伝文学、特にアパブランシャ語によるものの影響も考えられる。
　様々な初期ラーソーや各種韻律書の記述から推測されるように、おそらくラーソーという用語は、元々歌や踊りに適した形式という意味で使用されていたものと思われる。ラーソーより少し後に「パーグ」や「バーラーマーサー」といったジャンルの作品が、春の祭りの歌、別離と季節の歌といったような明確な性格付けを持って現れてくるが、これらは初期のラーソーとしてまとめられていたものから分離したものと考えられる。（雑誌論文④）

（2）祖師ネーミナータとクリシュナ

ジャイナ教の聖者のうち、古グジャラート語文学でしばしばとりあげられるネーミナータをテーマとした文学作品について分析した。その理由は古グジャラート語の文学の初期から非常に多く現れる説話であるため、新たな文学形式の生成に深く関わると想定されたためである。

まずネーミナータ説話自体についてジャイナ教聖典からプラークリット諸語やアパブランシャ語の聖者伝を経て古グジャラート語文学へといたる変化の様相を解明することを目指した。ネーミナータの婚約者であるラージャルは現代のジャイナ教では代表的な貞女の一人として挙げられるが、少なくとも『ウッタラプラーナ』といったジャイナ教古聖典ではネーミへの直接的な愛情表現は重視されておらず、ラージャルからネーミへの貞節さというのはことさらに表現されてはいない。またクリシュナ説話と融合した際も、例えばラージャルをネーミの結婚相手として見つけ出したのはクリシュナであったという挿話のように、クリシュナのエピソードの一部とされていることが多い。つまり、聖典ではラージャルとの結婚式を放棄して出家したネーミナータに重点が置かれており、聖者伝文学においてもその傾向が見られる。

一方、古グジャラート語文学の時代になると、ラージャルのネーミナータへの愛情表現を主題に据えた『ネーミナータ・チャトゥシュパディカー』を初めとしたバーラーマーサー文学やパーグ文学といったジャンルが登場する。それらの作品においてはラージャルのエピソードが頻繁に用いられていることから、ネーミナータ説話の変容は使用される言語や形式の変化に一定程度連動していると考えられる。また、愛情表現が中心となったネーミナータ説話は類似した要素を持つクリシュナ説話との関係を示唆する。実際、ラーソー以前のジャイナ教説話にはクリシュナが取り込まれ、ネーミナータの従兄弟という位置づけで 63 偉人の 1 人に数えられるようになっている。（雑誌論文②③、学会発表④）

（3）ジャイナ教説話におけるラーマの位置づけ

ジャイナ教説話においてラーマ物語とクリシュナ物語は大きな部分を占める。クリシュナは比較的早い時期からネーミナータと関係づけられており、また説話内ではネーミナータの下位に位置づけられてきた。クリシュナは殺生の罪を犯し地獄に転生する役割を負っており、祖師たるネーミナータとの対比が意図されていると推測される。

それに対し、ラーマ物語は祖師などの他の偉人との関係が希薄であり、比較的独立性が強い。ジャイナ教説話の主たる構成として祖師と転輪聖王のような出家者と世俗の対比があるが、ラーマ物語にはネーミナータのような出家側の重要人物がいないため、ラーマを出家側に配置する必要があったものと推測される。それに対してラーマの弟であるラクシュマナは殺生の罪を犯す存在として描かれ対比の対象となる。だが、ラーマ物語は何度もジャイナ教説話において取りあげられているにも関わらず、ジャイナ教の教義の点からは「ジャイナ化」が徹底されていない部分が散見される。（雑誌論文①）

（4）ジャイナ教における聖地信仰の発展

現在、北インド西部の代表的なジャイナ教聖地としてはギルナール山やシャトルンジャヤ山、アーブー山があるが、これらの聖地の主要寺院は 11-12 世紀以降に建立されたものが多い。一方、同時期の当該地域の文学作品の特徴として、古グジャラート語などの地域言語使用の活発化、ラーソーをはじめとした新たな文学の流行、そして聖地を称揚する聖地文学の登場があげられる。上にあげた聖地は主に祖師の寺院から構成されるが、現在見られる寺院の建立は聖地文学の登場と同時期である。ギルナール山はジャイナ教聖典にも祖師ネーミナータと関連付けた言及が見られるが、ネーミナータ寺院の建立は 12 世紀である。シャトルンジャヤ山は現在では祖師リシャバと強く関連付けられているが、その関係も 11 世紀より以前の文献は確認できない。聖地信仰が行われ始め、新たな文学形式が導入されたこの時期はグジャラートを含む北インド西部地域が政治的に大きな変化を被った時期に当たる。そのためこの二つの事象の背景には同じ要因が存在しうることを検討した。（学会発表①、②）

（5）ネーミナータ説話を中心とした古グジャラート語文学写本の収集と整理

各年度において現地の写本調査を行った。アーメダーバードの LD Institute、パータンの Hemacandra Gyan Mandir、ジャイプルの Apabhramsa Sahitya Academy、ジャイプルとジョードプルの Rajasthan Oriental Research Institute、バローダの Oriental Institute、プネーの Bhandarkar Orental Research Institute、インドールの Kundkund Gyan Peeth、ウッジャインの Scindia Oriental Research Institute に訪問し、ネーミナータ説話、古グジャラート語文学の未刊行の写本を収集した。

（6）今後の展望

本研究を遂行する中で、ジャイナ教文学の転換期においてクリシュナ説話が重要な役割を果たしていることが分かった。時代的にはやや後になるが、クリシュナ信仰に基づくバクティ運動が北インドで流行する時期と近いため、クリシュナ信仰を鍵としてジャイナ教文学の変化を説明するという方向性で今後の研究を進めていく。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計４件）

① 山畑倫志、ジャイナ教における六十三偉人の形成とラーマ説話の関係、印度學佛教學研究、査読有、2018、第 67 巻第 1 号、494-488
② 山畑倫志、ジャイナ教聖者伝の展開と人間観の変容、日本佛教學會年報、査読有、第 83 号、2018、90-109
③ 山畑倫志、ネーミナータ説話の変容 ： 行伝から季節詩へ、印度學佛教學研究、査読有、第 67 巻第 1 号、2017、494-488
DOI: 10.4259/ibk.66.1_475
④ 山畑倫志、聖者伝に拠らない初期ラーソー文献について、印度學佛教學研究、査読有、第 65 巻第 1 号、2016、248-243
DOI: 10.4259/ibk.65.1_248

〔学会発表〕（計７件）

① 山畑倫志、中世ジャイナ教における聖地信仰の形成、日本南アジア学会 30 周年記念連続シンポジウム(第 6 回)、2018 年 9 月
② 山畑倫志、初期グジャラート語文学の記述から見るジャイナ教の聖地、ジャイナ教国際研究ワークショップ：ジャイナ教研究の諸相、2018 年 9 月
③ 山畑倫志、ジャイナ教における六十三偉人の形成とラーマ説話の関係、日本印度学仏教学会第 69 回学術大会、2018 年 9 月
④ 山畑倫志、Connection of Old Gujarati Literature with Jain Carita — Capturing Kṛṣṇa tales and its effect、18th World Sanskrit Conference、2018 年 6 月
⑤ 山畑倫志、ジャイナ教聖者伝の展開と人間観の変容、日本佛教学会 2017 年度学術大会（第 87 回大会）、2017 年 9 月
⑥ 山畑倫志、ネーミナータ説話の変容 – 行伝から季節詩へ、日本印度学仏教学会第 68 回学術大会、2017 年 9 月
⑦ 山畑倫志、聖者伝に拠らない初期ラーソー文献について、日本印度学仏教学会第 67 回学術大会、2016 年 9 月

〔図書〕（計１件）

① 杉本良男編、丸善出版、インド文化事典、2018、 山畑倫志担当箇所「宗教と食（ジャイナ教）」、376 頁

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。